

ニュース

○行徳可動堰工事進む

可動堰は昨年末より井筒工から着手され、現在引続き施工中である。昨年度は井筒4基各30mの中、夫々6m分宛施工し、本年度は規定沈下深迄沈下させ、明年度には載荷試験、中埋コンクリートを実施する予定である。

本工事計画概要 江戸川改訂計画は昭和25年度より実施の運びとなり、野田市より上流部の引堤、野田市—江戸川町間の堤防嵩上及び増強、運河—江戸川町間の低水路拡張、放水路流頭部の可動堰新設、放水路の浚渫等が開始された。

改訂計画の流量5500m³/secは行徳町地先に於て江戸川水門を通じて旧川に1000、放水路に4500を流下せしめる。可動堰は放水路流頭部にある従来の固定堰(堰上高Y.P.+2.12m)の下流側低水路部に設け、径間30m、堰上高5mの転動堰3連を用い、堰上標高は江戸川本川の水門の扉天端高(Y.P.+2.80m)と同高として、利水の為に充分な水位を保ち、敷高は同水門と同高のY.P.-2.20mとして河床を維持し、計画高水流量を安全に放流せしめる。

堰体は円筒直径を3.50mとし、1.50mの下翼を附けた。操作は電動機により遠方操作とし、非常時用にディーゼル機関及び手動設備がある。

井筒基礎は深さ約30mで良好な砂層に達せしめ、井筒は長径平均24m、短径7mの小判形鉄筋コンク

リート造である。堰柱上部に捲上装置を設け、操作連絡用の橋梁を拡げて、有効幅員6mの県道橋とする。可動堰に要する鋼材約3000t、セメント約1万t、昭和29年度完成、総工費約8億円の子定である。

図-1 行徳可動堰附近平面図

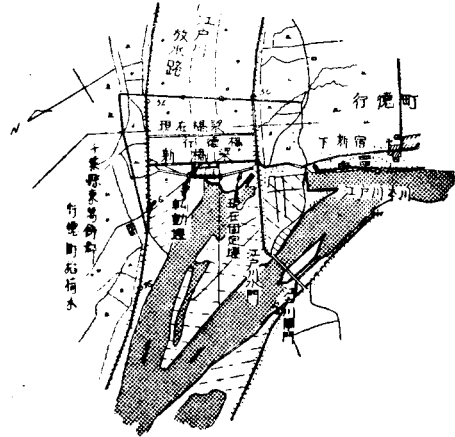


図-2 可動堰側面図

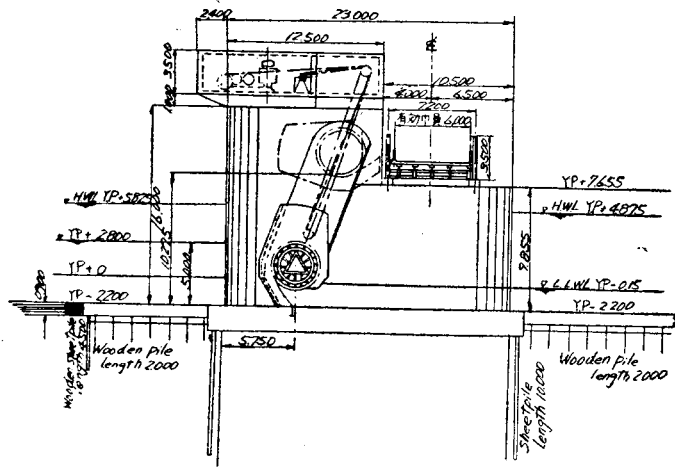
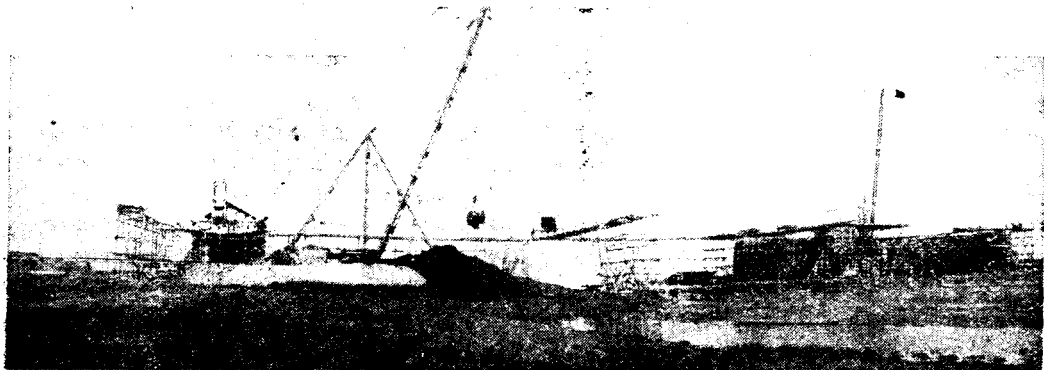


写真-1



(関東地建江戸川工事事務所長 山内一郎氏提供)

○野洲川ダム完成す

野洲川ダムは高さ 55.7m、長さ 141m のわが国最大の純灌漑用直線重力式ダムである。コンクリート約 10 万 m³、工費 4.5 億円を投じて、本年 7 月 8 日、終戦後最初のダムとして完成した。

野洲川は鈴鹿山脈に源を発し、滋賀県の南東部を流れて、琵琶湖に注ぐ準用河川である。流域小さくかつ山が浅く、その上荒廃が甚しいため、高水時の流量が急激に増大するに比して、夏期渇水量が極めて少ない。このため沿岸の 3 郡 18 町村にまたがる既耕地約 4 000 町歩は毎年灌漑用水に不足し、伏流水、地下水等の取水設備をして補給水を得ることに努力してきたが、それでも年々 1 割程度の減収をきたし、最も甚しかった時は 3 割減収 1 000 町歩に及んだこともあつたのである。

そこで上流部の滋賀県甲賀郡鮎河村にダムを築造しここに 720 万 m³ の貯水をすると同時に、下流に取入堰 2 箇所及び幹支線水路を完成して、旱害から救済目的を以つて、昭和 14 年県営にて着工したものである。その後諸種の事情により工事が殆んど進捗せず、昭和 22 年より農林省直轄工事として本格的に施工することとなり、今般一応ダムのみ完成したものである。

使用セメント量 25 000t、鋼材 260t、木材 15 000 石、延人員 1 300 000 人であつた。

本年 10 月より取入堰その他の工事に着手する予定で、全工事完成後は毎年米 2 万石、麦 7 000 石の増産が可能となる。

なお計画的に洪水吐を操作することによつて、下流部が毎年受けている被害をなくすることができ、この洪水吐には本年 7 月号に紹介した本邦最初のドラムゲートを設備している。また溢流面の型枠にハイドロ（米国製）を使用して、強度及び耐久性を増すようにし、流水による磨耗を防ぐようにしたのも新しい試みである。

（農林省野洲川農業水利事業所 久徳茂雄記）

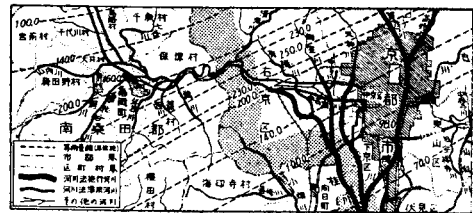
○不連続線のいたずら一京都府下の被害甚大

昭. 26. 7. 10 夜半より降りだした雨は、11 日 7 時より急速に雨勢を増し、南桑田郡亀岡町（京都市西方 20km）において観測したところによると、7 時から 11 時までの 4 時間に 145mm、最強は 8 時から 9 時までの間で 65mm であつた。しかも被害の状況より判断すると、不連続線は亀岡南部山地より京都市北部山地へかけて停滞したものと思われ、その降雨強度は 4 時間 200mm を突破したものと思われる。

このように強い雨が集中的に降つたため、被害も南

桑田郡並びに京都市に集中し、府下全域の土木関係被害額 23 億円のうち、右の 2 地域で 19 億円、83% を算している。死者 100 名余、流出家屋 100 戸余はこの地域のもののである。土木関係被害の概要をみると、南桑田郡内の鶴の川、西川、年谷川は全滅し、年谷川沿いの府県道亀岡茨木線は 3.7km のうち 60% が流失した。京都市関係の分については次項を参照されたい。なお今回の災害の特徴は山腹の崩壊であつて、山の大小にかかわらず、8 合日あたりからの崩壊が無数であり、この土砂流のため河川が閉塞され、被害を増大せしめている。新聞紙上に喧伝された災害防止溜池平和池についても、その原因については軽々に言い得ないにしても、この池の水が流入する年谷川が、池より上流部も、下流部と同じく荒廃していることをみれば、降雨強度がいかに強かつたか想像できる。

図一3 昭. 26. 7. 11. 日雨量分布



（京都府土木部 後藤明治記）

○京都市内の被害また甚大

京都市内における雨量は、11 日 3 時～12 時の 9 時間において 94.6 mm、1 時間最大 45.6 mm (9.30～10.30)、10 分間最大 10.5 mm (9.40～9.50) であつた。土木施設被害総額 13 億円、主なものは、鴨川、高野川筋の木橋の流失、国道 18 号線（西国街道）、府県道京都周山線の各所決潰等である。これらは洛北の山間部一帯に特に雨量が大であつたこと、戦中戦後の濫伐及びデラ、ヘスター、ジェーン台風によつて荒廃損傷した水源地帯の山林が数日來の降雨によつて、地表が相当の水分を含んでいたことと相俟つて、この雨量を調節できなかつたことによる。また市内の中小河川はすべて氾濫し、多大の被害を生じたが、これは瞬間的な豪雨による増水を下流部分が呑みきれなかつたためである。

被害の原因は上の通りであるが、昭和 10 年 6 月 28、29 日の大水害後の復旧復興計画が事業半ばに、支那事変、第 2 次大戦の勃発のため、一時休止となり、鴨

川筋橋梁の永久化が実現されていなかつたことも大きな原因の一つである。

(京都市土木局土木課 森田長雄記)

○北海道開発行政機構改革7月1日に発足す

新聞紙上に報告された通り7月1日を以て従来の北海道土木部のうち、国費関係は新設の北海道開発局(北海道開発庁所管)に、道費関係は在来の残留した道土木部にと2分せられその機構及び大体の人事も決定した。

◇北海道開発局関係(人事は省略)

局長一次長

官房: 総務, 人事厚生, 開発計画, 機械, 需品の5課

建設部: 建設計画, 治水道路建設の3課

港灣部: 港灣計画, 港灣建設の2課

農業水産部: 計画, 土地改良, 開拓, 水産の4課

営繕部: 建築, 設備の2課

現業機関として

開発建設部(札幌, 小樽, 函館, 旭川, 室蘭, 帯広, 釧路, 網走, 稚内, 留萌の各市)と石狩川治水事務所(札幌市)の10市へ事務所をおき, 夫々所長の下に事務, 技術の2次長をおく

附属機関として土木試験所(豊平町, 技術次長1名をおく)と建設機械工作所(江別町)をおく

◇道土木部関係

部長(田中彦敏): 次長(事務, 木村伊之助), 監理課(梅沢茂平), 河川課(三丁目喜一郎), 道路課(未定), 港灣課(谷口勝), 都市計画課(清水武夫)の5課

現業機関としては土木現業所を札幌, 小樽, 函館, 室蘭, 旭川, 帯広, 釧路, 網走, 留萌の

9ヶ所におき, 庶務, 工務の2課制とする。

○北海道における河水統制事業

(1) 雨龍川総合開発事業(鷹泊堰堤)

25年度9月に着工し28年3月竣功予定であるが, コンクリートプラントその他の機械設備も略々完了し, 8月に一部基礎コンクリートを開始する。計画大要下の如し。

工事費 4億9200万円

河川名 雨龍川, 鷹泊

貯水池: 集水面積 488km², 湛水面積 1.37km²

総貯水量 2151万m³, 有効貯水量 1591万m³

有効水深 14m

ダム: 溢流重力式, ローラーゲート 6m×8m5門
高さ 35m, 長さ 162m, コンクリート 5.5万m³

発電: 最大出力 5200kW, (平均 2900kW), 年間 2135万kWh, 使用水量 24.5m³/sec, 有効落差 28.5m~14.5m,

灌漑: 新規開田 1120町歩, 補水 3920町歩

(2) 幾春別川・芦別川総合開発事業

[本事業については本年5月大阪の年次大会で准員若島正君(講演概要 81頁)が講演したので内容は省略する]。

かねて計画中の本事業は北海道開発局の所管として, 幾春別桂沢ダム工事(工事費 22億円)が本年より着工した。本年度予算 3億円で, 機械設備及び仮設物を大体終了し, 来年よりコンクリート打を開始の予定。

なお詳細は次に照会のこと

(1)は札幌市南11条西1丁目

石狩川治水事務所 利水部長 高木 夫

(2)は札幌市北3条西5丁目

北海道開発建設部治水課 若島 正

(北海道横道地方委員提供)